

認知症の症状別対応方法

～お互いに安心して介護生活を送るために～

見当識障害

「今がいつか(時間)」「ここがどこか(場所)」「だれか(人)」がわからず、周囲の状況などを総合的に判断する能力が欠如している状態をいいます。環境が変わった時に、強く現れるといわれています。

以下が、見当識障害の代表的な例です。

- ①夏なのに暖房をつける、冬なのに冷房をつける
- ②夜中なのに、朝だと思い、起きて新聞を取りに行く
- ③外出すると家に戻れなくなる
- ④家族や親戚、友人が誰だか分からない



○見当識障害に対する対応方法

- ・ **時間の見当識**…なじみの場所にカレンダーを貼って○印をつけて確認したり、部屋に日光を取り込み、明るさからも昼夜の区別がつくようにしましょう。
- ・ **場所の見当識**…自分の家ではないと思っている人に、「あなたの家です」と説得するのは難しいことです。家かどうかで言い争うよりも、「居ても安心できる場所」と思えることが先決です。転居や改築、入院や入所などの際は、できるだけ思い出の品や使い慣れている家具をもっていきましょう。
- ・ **人の見当識**…家族の見分けがつかなくなったり、鏡に映る自分からなくなったりすることがあります。否定したり説得したりしようとせず、ご本人の訴えをよく聞いて、不安の軽減をはかりましょう。

見当識障害の人といると、想像もしていないような行動をとることがあります。時には、介助者の心を傷つけるようなことを言うことがあるかもしれません。しかし、そんな状況で介護者がイライラして怒鳴ってしまっても、何の意味もありません。できるだけ寛大な気持ちで、相手に合わせて行動するよう意識しましょう。

